

◆荒井類 選

《「サザエさん」一家の食事風景が滑稽味をかもす》

磯野家はみんなで正座豆ごはん 福永法弘

筆者の弟と生まれ年が同じ（一九五五年）福永法弘であるから、卓袱台に家族が正座して食事した時代を知っているのだろう。今思えば滑稽だったかもしれぬ。

テーブルと椅子の食事（家族の団欒）しか経験がない今時の若者は、「サザエさん」一家の食事風景をどう見ているのだろうか。

季語の「豆ごはん（夏）」が一句をもちたてている。

《モーリタニアの蛸<sup>たこ</sup>のゲソ》

春惜しむモーリタニアの蛸の足 矢島渚男

蛸の刺身をさかなに一杯やっているのだろうか。この蛸はどこ産？ モーリタニアです。ん？ モーリタニアってどこ。

モーリタニア【Mauritania】は、『大辞泉』によると、「アフリカ北西部、大西洋に面するイスラム共和国。首都ヌアクショット。国土の大部分はサハラ砂漠。鉄鉱石を産出し、遊牧・漁業が行われる。一九二〇年フランス保護領となったが、六〇年独立。人口二一四万（一九九二）」。

「モーリタニアの蛸の足」を食べているというだけでなにか滑稽である。「モーリタニアの蛸の足」でも「ゲソ」というのだろうか。

《舟のへさき（船首）が飛魚を蹴り出す》

つぎ／＼と飛魚<sup>あご</sup>を蹴り出す舳<sup>みよし</sup>かな 本井英

「舳（みよし）」とは「船首」の大和ことばである。であるから、この句の舟には和舟の雰囲気はただよう。その和舟の「舳＝へさき」が「つぎ／＼と飛魚（アゴ）を蹴り出」しているというのだから面白い。波を蹴って舟が進むと、驚いた飛魚が「つぎ／＼と」飛び出す。それを「飛魚を蹴り出す」と表現したのが手柄だと思う。擬人化で滑稽が生まれる例である。

---

《木の匙の味を意識したことがありますか？》

木の匙の味にて氷菓締めくくる 水上ゆめ

う〜ん、木の匙の味かぁ。氷菓を食べている最中には、木の匙のことなど気にはならない。だが、食べ終わるところになると、その木の匙が氷菓にぬれて、口中にその味を主張する。言われてみればそうなのだが、掲句に接するまでは、意識がそこにはいかなかった。

《バナナの歴史的変遷（？）がわかる句》

父と母いつもバナナをはんぶんこ 名村早智子

筆者は団塊の世代の殿（しんがり）をつとめるものであるが、子どもの頃、バナナは高級品だった。病気の見舞いにもらったものを食べるとか、来客のお土産のおすそわけをいただくとか、「貴重品」であった。

名村早智子は昭和二十二年生れだから、名村早智子の見た「父と母」は、「いつもバナナをはんぶんこ」していたのだろう。「父と母」の若い頃には（台湾が日本の植民地だったから）、バナナは高価なものではなく、庶民的なフルーツだった。大正十四年生れの筆者の母は、「昔はバナナは安かったのよ」と、よく言っていた。

戦後、外貨準備が少なかった日本では、輸入品であるバナナは高く、高級品だった。それでも、戦前には容易に食べられた「青春の味」バナナを「父と母」は「はんぶんこ」して食べたのだ。貧しき中にも驕りあり！

その後、日本が豊かになって、バナナが安くなっても、「はんぶんこ」してバナナを食べる「父と母」。

《「贅肉あり」生活にも、身体にも…》

八月十五日真幸く贅肉あり 池田澄子

八月十五日は終戦日（敗戦日）である。その言葉のすぐ後に「真幸く（まさきく）＝幸いなことに」と続く。

真幸く（まさきく）〔副〕（「ま」は接頭語）「さきく」を強めたいい方。無事に。しあわせに。（『精選版 日本国語大辞典』より）。

さいわいにも「贅肉あり」。――戦中、戦後の食糧難では国民の多くが栄養失調状態にあり、餓死する者もあった。それに比べたら、飽食の時代の我々は「真幸く＝幸いにも」贅肉を蓄えられるほどである。贅肉は、身体にも、生活にもついている。「断捨離」が話題になるほどだ。

池田澄子の視線は鋭い。そして表現は、「真幸く」という万葉以来の和語を用いて、巧くまとめられている。

鋭い批評眼と巧みな表現技術があっではじめて詠める名句だと思う。